

演題 20

臨地実習前教育についての検討

○^{ひやまゆかり} 檜山由香里 木村泰 佃将吾 谷口智也 山藤賢
(昭和医療技術専門学校)

【はじめに】本校においては、臨床検査技師になるにあたり決して欠かすことのできない要素を学ぶ場として、臨地実習を非常に大事に考えている。特にコミュニケーション能力は、就職後の現場でも大事なことであるが、それだけにとどまらず、学生にとって最初に触れる社会の現場である臨地実習先で要求されるものは、以前の医療現場と比べて非常に多くなってきている。現代の若者気質と合わせ、その対応には、それぞれの学校において工夫が凝らされていることと思う。本校で取り組んでいるいくつかの試みについて報告する。

【目的】医療人としての心の醸成は、臨地実習直前に研修をしたところで、一朝一夕に身につくものではない。入学時より、卒業後にいたるまで、様々な経験で身に付けていくものであるが、その中でも、臨地実習前に身につけておきたいことを中心に、本校が試みている教育の一部を紹介し、またその効果について検証する。

【内容】入学時よりの「あいさつ教育」は本校の教育理念の柱であり、コミュニケーションの第一歩として、建学以来一番大切にしている部分である。一年次には、「日本語表現法」「人間学」「生命の倫理」などの講座を中心に、コミュニケーションの大切さ、傾聴や表現の大切さ、自分自身の人生の在り方、などを学び、医療人としての心の醸成を試みている。二年次には、実際の接遇について学ぶ機会を多く設けている。人との繋がりを大事にするコミュニケーションスキル研修や、ディズニー研修における心の部分を中心にした接遇の本質を学ぶ機会、マナー研修における形としての接遇を理解する機会などが、その一部である。また臨地実習前には、OSCE(客観的臨床能力試験)を行い、学生にフィードバックしている。

【結果】日本語表現法やディズニー研修などは、本学会でも報告済みであるが、その他の講座・研修などに関しても、アンケート結果などを中心に、発表時に報告させていただく。

【考察】臨地実習には、現在、業界としての問題、学校としての問題、学生気質の問題などをはじめ、様々な問題が取り上げられており、各校でも様々な試みが行われている。現場での接遇の大切さなどは以前より言われていることであるが、我々も、毎年のように形を変えつつ、現在の学生に合った、必要と思われる研修を様々な様式で行っている。いずれにしろ、学生にとっては最初に触れる社会の現場である臨地実習先で学べることは、本当に多く、大事である。本校では3年生での6ヶ月間の臨地実習を、非常に大切に考えており、そこで学べることは、座学や学内教育だけでは学べない、生きた教育であると考えている。我々が育てるのは『臨床』検査技師であり、『臨床』に関して本当に学べるのは、『臨床』の現場だけからである。その第一歩である臨地実習のための、学校の考え方、在り方、準備の仕方といった部分は、これからのチーム医療を担う臨床検査技師教育にとって欠かすことのできない要素であり、学校の特色が最も現れる部分であると本校は考えている。我々の試みの一端を報告させていただくことで、また皆様からのご指導をいただき、今後の教育・医療人育成のさらなる向上に努めさせていただきたいと考えている。